

報 告

父親が行う育児に関する夫婦の性役割観と父親の
育児家事行動からみた「育児」の捉え方の特徴瀧本 千紗¹⁾, 濱 耕子²⁾, 室津 史子³⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、母親・父親双方を対象とし、夫婦各々の父親が行う育児に関する性役割観と父親の育児家事行動がどのように関連しているのか探索すること、夫婦それぞれの、父親が行う育児に関する性役割観の違いによって父親の育児家事行動に対する母親評価、母親期待、父親評価に違いがあるのかを探索することである。

第一子の1歳6か月児健康診査に来所した夫婦124組に対して、父親の育児家事行動、父親が行う育児に関する性役割観について調査した。最終的な有効回答は夫婦71組142人であった。父親が行う育児に関する性役割観は「父親は育児に積極的に参加すべき（以下、「積極的）」と考える群と、そう考えない群の2群に分け、育児家事行動と比較した（Mann-WhitneyのU検定）。母親が「積極的」と考える群（n=30）は、そう考えない群（n=38）に比べて、母親および父親各々が評価する父親の家事行動得点が高かった（U=301.0, $p < .01$, U=369.5, $p < .05$ ）。父親が「積極的」と考える群（n=36）は、そう考えない群（n=27）に比べて、母親が評価する父親の世話行動得点が高かった（U=342.5, $p < .05$ ）。母親が考える父親が行う育児に関する性役割観は、父親の家事行動に影響を与える可能性が考えられた。また、父親自身が考える父親が行う育児に関する性役割観は、自身の世話行動として行動化につながるものが推察された。

Key words : 育児家事行動, 性役割観, 1歳6か月児健康診査

I. 目 的

近年、核家族化や都市化、女性の高学歴化や社会進出に伴い、育児環境が変化してきている。その背景の一つには、性別役割分業観の変化が挙げられ、「イクメンプロジェクト」を契機に、父親の育児参加の必要性は社会的にも周知されるようになってきている。中央調査社の調べによると、父親が行う育児に関する性役割観について、「父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき」と答えた人は45.0%で年々増加傾向にある。これに対し、「父親は許す範囲内で育児に参加すべき」と答えた人は44.9%、「父親は外で働き、

母親が育児に専念すべき」と答えた人は8.5%であった¹⁾。父親の育児参加を肯定する考えが大多数を占めるが、積極的に参加すべきだと考える人は半数には及ばない状態が続いている。しかしこの調査における「育児」が、具体的にどのような内容を指すのかは明確にされていない。

日隈らは、1歳半になる子どもを養育する父親と母親に対して調査を行い、父親の育児家事行動に対する父親の自己評価と母親の期待の特徴について明らかにしている²⁾。調査の結果、父親の自己評価では、子どもに話しかける、抱っこする等の相手行動と、夫婦の会話、悩みの相談等の精神援助行動は高値であるが、

Characteristics of "Childcare" Perception Based on the Child-nurturing Perspectives of Married Couples and the Child-nurturing and Housework Behaviors of Fathers

(3155)

Chisa TAKIMOTO, Kouko HAMA, Fumiko MUROTSU

受付 19. 7. 11

1) 愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科（助産師）

採用 20. 8. 6

2) 石川県立看護大学看護学部母性・小児看護学講座（助産師）

3) 広島都市学園大学健康科学部看護学科（助産師）

子どもへの具体的な世話や家事行動の得点は低いことを報告している²⁾。一方で母親の期待得点は、父親が評価する父親の育児家事行動得点より高く、そのほとんどに有意差が認められた。

寺見らは、保育園に在籍している子どもの父親と母親に対して調査を行い、父親の家事参加と育児参加に対する父親の自己評価と、母親の評価、育児意識の特徴について明らかにしている³⁾。調査の結果、父親の家事参加は母親も父親と同じように評価している一方で、父親の育児参加は多くの項目で母親による評価が父親の自己評価を下回っていることが報告されている。

これらの先行研究から、父親の育児家事行動の自己評価と母親の評価や期待には差が生じていることがわかる。その背景として塩澤らは⁴⁾、性役割に対して平等主義的な父親は育児家実施意欲が高いことを明らかにしており、夫婦それぞれが捉える父親の「育児家事行動」は性役割観の影響を受けているのではないかと推察される。

本研究では、父親の育児家事行動を、当事者である父親に対してはその自己評価、母親に対してはその期待と評価について調査して3側面から検討し、父親が行う育児に関する性役割観との関連を検討することで、父親が行う育児に関する性役割観による夫婦それぞれが捉える父親の「育児家事行動」の特徴について明らかにできると考える。夫婦それぞれが捉える父親の「育児家事行動」の特徴について明らかにすることで、臨床場面において、さまざまなライフステージにおける情報提供や夫婦双方への教育への一助になると考える。また、同胞がいる家庭では、夫の育児家事行動や父親が行う育児に関する性役割観は変わる可能性があり、第一子か第二子以上かを区別して検討する必要がある。したがって本研究の目的は、第一子のみを養育する母親・父親双方を対象とし、①夫婦それぞれの父親が行う育児に関する性役割観と父親の育児家事行動がどのように関連しているのか探索すること、②夫婦それぞれの父親が行う育児に関する性役割観の違いによって、父親の育児家事行動に対する母親評価、母親期待、父親評価に違いがあるのかを探索することである。これらを探索することにより、父親の育児家事行動からみた「育児」の捉え方の特徴について検討する。

II. 対象と方法

1. 調査期間

平成27年7～11月。

2. 研究対象者

A県内の保健センターに、第一子の1歳6か月児健康診査のため来所した保護者夫婦124組248人。

3. 調査方法

i. 調査用紙

無記名自記式アンケート調査用紙を用いた。研究対象者の属性として、年齢、家族構成、就業形態、父親が行う育児に関する性役割観、父親の育児家事行動等を尋ねた。

日隈らの育児家事行動²⁾は、「話しかける」・「抱っこする」などの相手行動5項目、「食事をさせる」・「排泄の世話」などの世話行動6項目、「育児の助言をすすめる」・「夫婦の会話」などの精神援助行動4項目、「炊事」・「洗濯」などの家事行動4項目の計19項目から構成されている。評定は1～4点(思わない、あまり思わない、やや思う、思う)までの4段階で、得点が高いほど育児家事行動を行っていることを示している。日隈らの育児家事行動は、ほかの研究で使用されている父親の育児家事行動に共通した具体的な項目に加えて、先行研究でその重要性が明らかになっている母親に対する情緒的サポートの項目が含まれていること、先行研究でも多く利用されており^{2,5,6)}、結果が比較できることから本研究で使用した。本研究では、夫婦それぞれが考える父親の育児家事の実際と母親の父親に対する期待を知るため、母親には母親が評価する父親の育児家事行動と、父親に期待する育児家事行動を、父親には自身が評価する育児家事行動を尋ねた。日隈らの育児家事行動の使用については、著者から口頭および文書で許諾を得ている。

父親が行う育児に関する性役割観は、父親の育児参加に対する考えを「父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき」、「父親は許す範囲内で、育児をすればよい」、「父親は外で働き、母親が育児に専念すべき」、「その他・わからない」から選択する形で質問した。

ii. 配布および回収方法

研究の趣旨と方法を保健センターの代表者に文書および口頭で説明し了解を得た。保健センターから来所

予定者に向けた1歳6か月児健康診査の案内文書に研究依頼書と調査用紙を保健センターの担当者が同封し、同意が得られる場合は夫婦別に回答済みの調査用紙を厳封し、1歳6か月児健康診査時に提出していただくよう依頼した。

4. 分析方法

記述統計を算出後、夫婦間の属性比較には χ^2 検定を使用した。本研究における育児家事行動は正規分布および等分散が仮定できなかったため、父親の育児家事行動の「母親評価」「母親期待」「父親評価」間の比較は、Kruskal-Wallis検定後、Bonferroni法による多重比較検定を行った。父親が行う育児に関する夫婦の性役割観が夫婦間で一致するか否かや、性役割観の夫婦間での組み合わせによる父親の育児家事行動を比較するため、Mann-WhitneyのU検定やKruskal-Wallis検定とBonferroni法による多重比較検定を行った。また、父親が行う育児に関する夫婦の性役割観を「父親は育児に積極的に参加すべき（以下、「積極的）」と考える群とそう考えない群の2群に分け、Mann-WhitneyのU検定を用いて父親の育児家事行動を比較した。データの分析は、Windows版統計ソフトIBM SPSS Statistics version 24を使用し、有意水準は5%未満とした。

5. 倫理的配慮

保健センターの責任者、研究対象者に研究依頼書を用いて研究目的と方法の説明を行った。研究対象者宛の依頼文では、研究依頼からアンケート回収までの過程において、調査施設に承諾を得て実施していること、研究自体は調査施設とは関係のないことを明記した。本調査への協力は研究対象者の自由意思であり、調査用紙の回収をもって同意を得たとみなした。また、ひとり親家庭等特別な事情を有する家庭への配布については協力施設の責任者の判断を仰ぎ、対象から除外した。回答の有無により研究対象者に不利益はなく、個人の特長はしないことを説明した。研究対象者には、母親と父親の調査内容を一致させて分析するため、調査用紙には夫婦ごとに同じ番号を振ることの了解を得た。調査用紙回収の際は強制力が働かないよう、回収箱を健診会場外に留置し、回答済の調査用紙を忘れた研究対象者に返信用封筒を配布する目的で、回収場所に張り紙で明示した。また、研究者は研究対象者が自

主的に忘れたと申し出てきた場合にのみ返信用封筒を渡し、研究者から研究対象者へ調査用紙持参の有無を尋ねることは控えた。本研究は平成27年度愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：看27-3）。

Ⅲ. 結 果

1. 配布および回収結果

質問紙は124組248人の夫婦に配布した。回収数および回収率は母親72人(58.1%)、父親79人(63.7%)であった。分析対象は、夫婦の回答が揃ったものとし、最終的な有効回答は、夫婦71組142人(有効回答率57.3%)であった。

2. 研究対象者の属性

家族構成は、核家族56組(80.0%)、拡大家族14組(20.0%)であった(表1)。

最も育児を担当している人は児の母親だと答えた母親は69人(97.2%)、父親は67人(95.7%)、児の母親以外だと答えた母親は2人(2.8%)、父親は4人(4.3%)であった。二番目に育児を担当している人は児の父親だと答えた母親は50人(72.5%)、父親は48人(68.6%)、児の父親以外と答えた母親は21人(27.5%)、父親は23人(31.4%)であった。三番目に育児を担当する人としては、母親は実母21人(33.3%)、児の父親14人(22.6%)、それ以外36人(44.1%)と回答し、父親は義母19人(30.6%)、自分自身14人(22.6%)、それ以外38人(46.8%)と回答した。妊娠期におけるこれらの属性を夫婦間で比較をしたところ χ^2 検定における有意差は認められなかった。

母親の就業形態はフルタイム勤務15人(21.1%)、パートタイム8人(11.3%)、専業主婦・その他48人(67.6%)であった。また、就業している人の休日は週 2.2 ± 0.7 日であった。夜勤をしている人はいなかった。

父親の就業形態はフルタイムまたは自営62人(88.6%)、パートタイム・その他9人(11.4%)であった。休日は週 1.5 ± 0.5 日、夜勤をしている人は20人(28.6%)で平均夜勤回数は週 1.7 ± 1.3 回であった。

3. 父親が行う育児に関する性役割観

母親では「積極的」が31人(43.7%)、「許す範囲内で育児をすればよい」が39人(54.9%)、「母親が育児に専念すべき」が1人(1.4%)であった。

表1 研究対象者の属性

項目	母親 (n=71)	父親 (n=71)
年齢 (歳) [平均±SD]	31.6±5.2	32.7±5.7
家族構成 (組)	核家族 56 (80.0%) 拡大家族 14 (20.0%)	
最も育児を担当している人	児の母親 69 (97.2%) 児の母親以外 2 (2.8%)	児の母親 67 (95.7%) 児の母親以外 4 (4.3%)
二番目に育児を担当している人	児の父親 50 (72.5%) 児の父親以外 21 (27.5%)	児の父親 48 (68.6%) 児の父親以外 23 (31.4%)
三番目に育児を担当している人	実母 21 (33.3%) 児の父親 14 (22.6%) それ以外 36 (44.1%)	義母 19 (30.6%) 児の父親 14 (22.6%) それ以外 38 (46.8%)
就業形態	フルタイム 15 (21.1%) パートタイム 8 (11.3%) 専業主婦・その他 48 (67.6%)	フルタイム・自营 62 (88.6%) パートタイム・その他 9 (11.4%)
就業者の休日日数 (日/週)	(n=22) 2.2±0.7 (n=71)	1.5±0.5
夜勤日数 (日/週)	平均±SD (母親 n=22) 0.0±0.0	平均±SD (父親 n=71) 0.7±1.3
夜勤回数 ¹⁾	0回 22 (100.0%)	0回 50 (71.4%)
(母親 n=22)	1回 0 (0.0%)	1回 6 (8.6%)
(父親 n=70)	2回 0 (0.0%)	2回 8 (11.4%)
	3回 0 (0.0%)	3回 2 (2.9%)
	4回 0 (0.0%)	4回 2 (2.9%)
	5回 0 (0.0%)	5回 1 (1.4%)
	6回 0 (0.0%)	6回 1 (1.4%)
	7回 0 (0.0%)	7回 0 (0.0%)
父親の育児参加に対する考え ²⁾	積極的 31 (43.7%) 許す範囲 39 (54.9%) 母親が育児に専念 1 (1.4%) その他・わからない 0 (0.0%) 夫婦間の考えが一致 34組 (47.9%) 夫婦間の考えが不一致 37組 (52.1%)	積極的 39 (55.0%) 許す範囲 28 (39.4%) 母親が育児に専念 1 (1.4%) その他・わからない 3 (4.2%)

¹⁾父親の夜勤回数は、無回答1人を除く。

²⁾父親の育児参加に対する考えの回答「積極的」は「父親も母親と育児を分担して、積極的に参加すべき」、
「許す範囲」は「父親は許す範囲内で、育児をすればよい」、
「母親が育児に専念」は「父親は外で働き、母親が育児に専念すべき」を指す。

父親では「積極的」が39人 (55.0%)、「許す範囲内で育児をすればよい」が28人 (39.4%)、「母親が育児に専念すべき」が1人 (1.4%)、「その他・わからない」が3人 (4.2%)であった。母親より「積極的」と考える割合が高かったが、夫婦間に有意差は認められなかった (表1)。

4. 父親の育児家事行動の特徴

本研究における育児家事行動のCronbachの α 係数は、下位項目得点は.741~.895、合計得点は.901~.922であった。Kruskal-Wallis検定とBonferroni法による多重比較検定を行い、父親の育児家事行動を「母親評価」、「母親期待」、「父親評価」で比較した。相手行

動得点は母親期待が父親評価より有意に高かった ($p < .05$)。また、相手行動の下位項目の一つである「父子での外出」は母親期待が母親評価や父親評価より有意に高かった (ともに $p < .05$)。「留守番」は母親期待が父親評価より有意に高かった ($p < .05$)。相手行動以外では、有意な差異はなかった (表2)。

5. 父親が行う育児に関する性役割観と父親の育児家事行動の関連

父親が行う育児に関する性役割観について夫婦間で一致した夫婦は35組 (52.2%)、一致しなかった夫婦は32組 (47.8%)で、父親が行う育児に関する性役割観の夫婦間での一致・不一致による父親の育児家事行動

表2 父親の育児家事行動の比較 (n=142) 表内は平均±SD

項目	母親評価 (n=71)	母親期待 (n=71)	父親評価 (n=71)
話しかける	3.7±0.5	3.6±0.6	3.6±0.5
抱っこする	3.8±0.4	3.7±0.6	3.7±0.5
遊び相手	3.6±0.6	3.7±0.7	3.5±0.6
父子での外出*	2.5±1.1	3.0±1.0	2.5±1.0
留守番*	2.7±1.1	3.0±0.9	2.5±1.0
相手行動*	16.3±2.8	17.0±3.1	15.9±2.7
Cronbachのα係数	.745	.838	.741
食事	3.0±0.9	3.2±0.9	3.0±0.9
排泄	3.1±1.1	3.1±0.9	2.9±0.9
入浴	3.6±0.7	3.6±0.7	3.6±0.7
着替え	3.1±1.0	3.2±0.9	3.0±0.8
夜間対応	2.6±1.0	2.5±1.1	2.5±1.0
寝かしつけ	2.3±1.2	2.3±1.1	2.2±1.0
世話行動	17.6±4.5	17.9±4.5	17.1±3.9
Cronbachのα係数	.841	.895	.837
育児の助言	2.7±1.0	2.7±1.0	2.4±1.0
夫婦の会話	3.4±0.7	3.5±0.8	3.3±0.7
悩み相談*	3.1±1.0	3.3±1.0	2.9±0.9
体調の気遣い	3.1±1.0	3.3±0.9	3.1±0.7
精神援助行動*	12.3±2.9	12.7±3.0	11.7±2.5
Cronbachのα係数	.791	.806	.743
炊事	2.3±1.2	2.3±1.1	2.2±1.1
洗濯	2.3±1.2	2.3±1.2	2.1±1.1
買い物	2.6±1.2	2.6±1.1	2.5±1.0
掃除	2.3±1.2	2.3±1.1	2.2±1.1
家事行動	9.5±3.8	9.4±3.8	9.0±3.6
Cronbachのα係数	.866	.856	.847
合計	55.8±11.6	57.1±11.6	53.7±10.1
Cronbachのα係数	.915	.922	.901

項目欄の*はKruskal-Wallis検定の結果 ($p<.05$) を示す。
 得点間の*はBonferroni法による多重比較検定の結果 ($p<.05$) を示す。

得点の統計学的有意差は認められなかった。

夫婦が認識する父親が行う育児に関する性役割観は4群に大別された(表3)。これら4群を独立変数、父親の育児家事行動を従属変数としてKruskal-Wallis検定とBonferroni法による多重比較検定を行った結果、夫婦ともに「積極的」と考える群は、夫婦ともに「許す範囲内で育児に参加すべき」と考える群に比べて有意に母親が評価する父親の家事行動得点が高かった($p<.05$) (表3)。

次に、父親と母親それぞれで「積極的」と考える群とそう考えない群の2群に分けた(表4)。これら2群を独立変数、父親の育児家事行動を従属変数としてMann-WhitneyのU検定を行った結果、母親が「積極的」と考える群は、そう考えない群に比べて母親お

よび父親が評価する父親の家事行動得点が高かった(順に $U=301.0, p<.01, U=369.5, p<.05$)。父親が「積極的」と考える群は、そう考えない群に比べて母親が評価する父親の世話行動得点が高かった($U=342.5, p<.05$)。それ以外の育児家事行動では、母親および父親が「積極的」と考える群とそう考えない群間に有意な差異はなかった(表4)。

IV. 考 察

1. 研究対象者の属性

児童のいる世帯における核家族世帯率は71.6%であり、本研究対象の核家族世帯率80.0%は全国と比較して高い⁷⁾。これは調査を実施した市町村がA県の県庁所在地のベッドタウンである地域特性が影響している

表3 父親が行う育児に関する性役割観別, 父親の育児家事行動得点(1)

n=67 平均±SD	夫婦間一致 (n=35)		夫婦間不一致 (n=32)	
	母:積極的×父:積極的 (n=18)	母:許す範囲×父:許す範囲 (n=17)	母:許す範囲×父:積極的 (n=21)	母:積極的×父:許す範囲 (n=11)
相手行動				
母親評価	17.7±2.5	15.7±2.4	16.1±3.1	16.3±2.8
母親期待	18.0±2.1	17.1±2.3	16.2±4.2	17.7±2.9
父親評価	16.3±3.1	14.9±2.4	16.4±2.7	15.4±2.3
世話行動				
母親評価	20.0±4.1	16.6±4.2	17.3±4.3	17.6±4.2
母親期待	19.5±4.4	17.7±3.4	16.9±4.7	19.0±4.5
父親評価	18.4±4.1	16.3±3.9	17.2±3.7	16.6±4.3
精神援助行動				
母親評価	12.5±3.3	12.8±2.8	12.8±2.5	11.4±2.6
母親期待	13.4±3.2	12.9±2.5	12.4±3.3	12.5±2.3
父親評価	11.9±2.9	11.9±1.7	12.1±2.4	11.5±2.8
家事行動				
母親評価*	11.8±3.3	7.6±3.2	8.7±3.6	10.3±4.0
母親期待	10.4±3.6	9.0±4.2	8.3±3.0	11.4±4.0
父親評価	10.7±4.1	7.8±2.7	8.0±3.1	9.6±3.8
育児家事行動 (合計)				
母親評価	61.9±11.8	52.7±8.3	55.0±11.1	56.0±12.0
母親期待	61.8±10.7	56.9±8.6	53.6±12.4	60.6±11.8
父親評価	57.4±12.4	50.8±8.4	53.7±8.9	52.9±10.3

項目欄の*はKruskal-Wallis検定の結果($p<.05$)を示す。

得点間の*はBonferroni法による多重比較検定の結果($p<.05$)を示す。

と考えられた。

平成22年出生児の1歳6か月時点での就業状況は、無職(学生を含む)27.6%, 勤め(常勤)24.2%, 勤め(パート・アルバイト)12.5%, 自営業・家業, 内職, その他4.8%である⁸⁾。これと比較すると今回対象とした母親は全国と比較して有職者が少なく, 専業主婦が多い傾向にあるといえる。これは, 全国と比較して高い核家族率であることも関係していると考えられる。過去6か月間深夜業に従事した男性の割合は23.8%であり⁹⁾, 父親対象者の夜勤割合28.6%は全国平均と比較して高い傾向にあるといえる。これは, 母親の専業主婦率が全国と比較して高いこととも関連していると考えられる。

以上のことより本研究における対象者は, 全国と比較して核家族率と母親の専業主婦率, 父親の夜勤割合が高い集団であり, 本研究結果が第一子の誕生から1年半経過した夫婦全体の状態を反映しているとは言い難い。

夫婦それぞれが考える, 最も育児を担当している人, 二番目に育児を担当している人, 三番目に育児を担当

している人に夫婦間の有意差は認められなかったことから, 育児担当者の実際においては, 夫婦がほぼ同一の認識のもと育児を行っていることが推察される。

2. 父親が行う育児に関する性役割観

本研究では, 「積極的」と答えた人は母親で31人(43.7%), 父親で39人(54.9%)と, 半数ほどに留まる結果となっている。これは, 中央調査社による, 2012年が45.0%で年々増加傾向であるという結果や¹⁾, 本研究と同じ1歳6か月児を養育する夫婦を対象とした先行研究で報告されている, 両親で育児をとるといふ意識は高まっているが, 育児の中心的な担い手は依然として母親であるという結果を支持した¹⁰⁾。これは, 本研究対象集団の核家族率と母親の専業主婦率が高いという特徴も関連していることが考えられ, 育児の中心的な担い手としての母親という認識が対象集団において特に強い様子が推察される。また, 半数近くの夫婦において, 父親が行う育児に関する性役割観が夫婦間で一致しなかった。つまり, 育児を実際に行ってい

表4 父親が行う育児に関する性役割観別, 父親の育児家事行動得点 (2)

平均±SD	母親 (n=68)		父親 (n=63)	
	積極的に参加すべき (n=30)	それ以外 (n=38)	積極的に参加すべき (n=36)	それ以外 (n=27)
相手行動				
母親評価	17.0±2.6	15.8±2.9	16.9±2.9	15.6±2.6
母親期待	17.6±2.6	16.5±3.4	17.1±3.4	16.9±2.6
父親評価	16.1±2.8	15.7±2.6	16.4±2.8	15.3±2.4
世話行動				
母親評価	18.6±4.6	16.8±4.3	18.6±4.4	16.3±4.3*
母親期待	18.8±4.7	17.2±4.3	18.1±4.7	17.6±4.3
父親評価	17.8±4.1	16.5±3.8	17.8±3.9	16.3±3.9
精神援助行動				
母親評価	11.8±3.1	12.7±2.6	12.7±2.9	11.9±2.8
母親期待	12.8±3.1	12.7±2.9	12.9±3.3	12.5±2.5
父親評価	11.6±2.8	11.8±2.2	12.0±2.6	11.4±2.3
家事行動				
母親評価	10.9±3.8	8.4±3.5**	10.2±3.8	8.7±3.8
母親期待	10.4±3.8	8.7±3.7	9.2±3.4	9.7±4.3
父親評価	10.3±4.0	7.9±2.8*	9.2±3.8	8.6±3.3
育児家事行動 (合計)				
母親評価	58.5±12.6	53.6±10.3	58.3±11.8	52.5±10.5
母親期待	59.8±12.0	55.1±11.1	57.3±12.3	56.8±11.0
父親評価	55.8±11.4	52.0±8.7	55.4±10.7	51.6±9.1

Mann-Whitney の U 検定

** $p < .01$, * $p < .05$

る者の認識は一致している一方で、夫婦それぞれで父親の育児に関する思いや行動には違いがある可能性が明らかとなった。

3. 父親の育児家事行動の特徴

父親の育児家事行動における、母親評価、母親期待、父親評価の得点は各項目において近似した高低の変化を示し、すべての項目において父親評価が母親評価および母親期待よりも低かった。「父子での外出」や「留守番」の項目において母親期待が父親評価より有意に高く (ともに $p < .05$)、母親は、父親と子どもが日中二人で過ごし、母親が一人になる時間を期待していることが推察できる。日頃育児に追われ一人の時間が欲しいと感じている母親は多いと思われる¹¹⁾。これらの状況に加え、今回の研究対象者は核家族率と父親の夜勤割合が高い特徴があることから、夜間の育児が母親に集中する分、夜勤に従事する父親が在宅する日中に、母親が休息を求めていることも背景の一つとして考えられた。

4. 父親が行う育児に関する性役割観と父親の育児家事行動の関連

本研究において、半数近くの夫婦で父親が行う育児に関する性役割観が夫婦間で一致しなかったが、一致・不一致の違いによる父親の育児家事行動得点の有意差は認められなかったことから、夫婦間での父親が行う育児に関する性役割観の意見のずれは、父親の行う育児の母親評価や期待、父親評価には関連しない可能性が示唆された。しかし、夫婦間で意見が一致している中で、母親が評価する父親の家事行動得点を見ると、夫婦ともに「積極的」と考える群は、夫婦ともに「許す範囲内で育児に参加すべき」と考える群に比べて有意に高かった。これは、性役割観に対する夫婦の志向程度が父親の育児家事行動の程度に関連するのではないかと考えられる。

また、母親が「積極的」と考える群は、そう考えない群と比較して、父親の家事行動得点が母親、父親の評価ともに高かった。つまり、母親が考える父親が行う育児に関する性役割観は父親の家事行動と関連がある可能性が示唆された。ここでは父親の、世話行動等

ではなく家事行動得点で有意差がみられた理由について考察する。本研究において家事行動として示されている「炊事」、「洗濯」、「買い物」、「掃除」は、父親がこれまでに実施経験がある場合、単独で行えること、方法とゴールが明確であることから、母親は育児の一部としてそれらの家事を父親に依頼しやすく、父親も取り組みやすいのではないかと考えた。また、児出生前からこれらの家事の役割分担がなされていた可能性も考えられる。

一方で、父親が「積極的」と考える群は、そう考えない群と比較して、母親が評価する父親の世話行動得点が高かった。このことから、父親が考える父親が行う育児に関する性役割観は世話行動として行動化につながるものがうかがわれた。父親は「食事」、「入浴」、「寝かしつけ」等の世話行動を育児としてイメージしやすいことが背景にあると考える。家事についての質的な研究によると、女性がする家事は、掃除、料理、洗濯のように、毎日繰り返して行われる仕事が多いのに対して、男性は、家庭大工、庭掃除、ゴミ捨てなど不規則で回数の少ない仕事が多い¹²⁾。このことから本研究で項目として挙げた毎日繰り返して行われる仕事は、父親の行う家事としてあまり定着していないことがうかがえる。母親は父親の育児家事行動について具体的な育児だけでなく毎日繰り返して行われる日常の家事も含めた広い捉え方をしているが、父親はより具体的な内容を限局的に捉えている傾向があると示唆された。先行研究では、日本男性の場合は、育児に関わる時間がほかの家事関連時間より多い傾向にあることや¹³⁾、男性は家事より育児に積極的に参加していることが明らかになっている¹⁴⁾。本研究において、母親の、父親は育児に積極的に参加すべきだと考えるということが父親の「家事行動」と関連していた一方で、父親のそれは自身の「世話行動」と関連していたことから、父親の自身が育児を行うことに関する性役割観は、母親のそれと比較すると、父親の家事行動までは影響していないことが考えられた。

また、母親が「積極的」と考える群での比較では夫婦双方の評価で有意差が認められたのに対して、父親が「積極的」と考える群での比較では母親の評価のみ有意差が認められた。父親が考える父親が行う育児に関する性役割観は、自身が評価する育児家事行動には影響しないことが考えられた。

Belsky らは、育児期はこれまでに夫婦二人の二者

関係から、妊娠・出産を機に子どもを含めた三者関係へと移行するため、夫婦によって、この移行期に適切に対応できなければ夫婦関係は悪化すると報告している¹⁵⁾。また、Kluwer らは、子どもが生まれてからの家事や育児分担にまつわる不公平感が結婚の満足度を低下させ、結婚の質を変化させると報告している¹⁶⁾。男性は家事より育児に積極的に参加しているという先行研究からもわかるように¹⁴⁾、父親はこれまでの夫婦二者の関係から子どもを含めた三者関係へと移行した現在、世話行動としての育児には意識が向いているが、日常の家事は育児の一部として捉えていない現状が考えられる。漆野は¹⁷⁾、夫婦間での育児、家事の役割分担に関連する文献研究の中で、育児は行っても父親の家事の時間が変化しないことで生じる不公平感を指摘し、家事も育児支援の一つとして意識していくことの必要性を述べている。本研究によって明らかとなった母親と父親が育児として捉える範囲のギャップが、家事や育児分担にまつわる不公平感¹⁶⁾に結びつく一因になっているのではないだろうか。

児に対する愛着の点においても、父親が児に直接関与する世話行動を積極的に行うことが重要であることは明らかである¹⁸⁾。しかし、世話行動でなくても、母親が父親の育児の範囲として捉える家事行動に関わることで、間接的に共同で育児を行っている母親は捉えることができると考える。石井は、「夫の育児・家事参加に関しては、夫自身の考え方や置かれている状況ばかりでなく、妻の意識にも注目することが重要である」と述べている¹⁹⁾。父親が考える父親が行う育児に関する性役割観を尊重しつつも、妻の考える父親が行う育児に関する性役割観にも注目することができるよう助産師が意図的に関わっていくことが重要であると考えられる。

わが国は、男性があまり育児に関わらないという歴史的な経緯を持っており、桑名らは「多くの父親は伝統的な父親イメージに影響されながらも現実に対応すべく、ギャップを感じながら育児に関わりストレスを経験していると思われる」と述べている²⁰⁾。医療職として、父親のストレスや葛藤にも目を向け、父親が母親との相互作用の中で自らが目指す父親イメージをつくり出していけるよう、性差による父親が行う育児に関する性役割観の特徴を尊重した支援を行っていくことが望まれる。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象者集団は、全国平均と比較して核家族率、母親の専業主婦率、父親の夜勤割合が高いという偏りがあった。また対象者は71組であり、十分なサンプル数とはいえない。これは、父親からのデータ収集が容易ではないことに加え、夫婦を一組とした調査研究であることによる。また、今回の調査用紙回収では、父親の回答を母親が父親へ依頼し1歳6か月児健康診査時に回収、持参する方法をとっているため、回収できた夫婦は1歳6か月児健康診査対象のそれらのやりとりが可能な、比較的夫婦関係が良好な夫婦であるといえる。よって、本研究結果が、第一子の誕生から1年半経過した夫婦全体の状態を反映しているとは言い難い。今後は、児の年齢の幅を広げ、子どもの人数や年齢別に比較することも検討し、調査を行っていく必要がある。

V. 結 論

父親が行う育児に関する夫婦の性役割観と父親の育児家事行動からみた「育児」の捉え方の特徴を調査し、以下の結論を得た。

1. 父親の育児家事行動を「母親評価」、「母親期待」、「父親評価」間で比較したところ、「父子での外出」は母親期待が母親評価や父親評価より有意に高く、相手行動得点と「留守番」は母親期待が父親評価より有意に高かった ($p < .05$)。
2. 母親が「積極的」と考える群は、そう考えない群に比べて母親および父親が評価する父親の家事行動得点が高かった ($p < .01$, $p < .05$)。
3. 父親が「積極的」と考える群は、そう考えない群に比べて母親が評価する父親の世話行動得点が高かった ($p < .05$)。

謝 辞

本研究にご協力くださいましたお母様方、お父様方、保健センターの皆様へ深く感謝いたします。

本研究は愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻修士課程の修士論文の一部を加筆修正したものである。本研究の一部は第38回日本看護科学学会学術集会（平成30年12月、愛媛）において発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 中央調査社. 父親の育児参加に関する世論調査. 中央調査報, 2012 : 659.
- 2) 日隈ふみ子, 藤原千恵子, 石井京子. 親としての発達に関する研究—1歳半児をもつ父親の育児家事行動の観点から—. 日本助産学会誌 1999 ; 12 (2) : 56-63.
- 3) 寺見陽子, 南 憲治. 父親の家事・育児意識と行動の変容とその要因に関する研究—2000年と2011年のデータ比較を通して—. 神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇 2017 ; 6 : 119-135.
- 4) 塩澤真由美, 石田貞代, 萩原結花. 出産後早期における父親の育児家事実施意欲に関する研究—母親の期待・性役割態度・出産準備教育との関連—. 母性衛生 2007 ; 47 (4) : 585-589.
- 5) 橘 千恵, 中村絵里子, 中島夕美, 他. 夫の育児家事行動の特徴と子どもへの愛着, 夫婦関係満足度との関連—妻との比較—. 母性衛生 2008 ; 49 (1) : 65-73.
- 6) 藤原千恵子, 日隈ふみ子, 石井京子. 3か月児をもつ父親の育児家事行動と母親の父親に対する期待との関連—育児家事観の観点から—. 助産婦雑誌 1997 ; 51 (6) : 527-532.
- 7) 厚生労働省. “平成26年 国民生活基礎調査の概況” <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/dl/02.pdf> (参照2019-01-31)
- 8) 厚生労働省. “21世紀出生児縦断調査（平成22年出生児）結果の概要” https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/16/dl/h22_kekka_01.pdf (参照2019-01-31)
- 9) 厚生労働省. 政府統計の総合窓口 (e-Stat). “労働安全衛生特別調査（労働者健康状況調査）/平成24年労働者健康状況調査—労働者、過去6か月間における深夜業従事の有無別労働者割合—” https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450095&tstat=000001020508&cycle=0&tclass1=000001064060&tclass2=000001064062&stat_infid=000023628233&second2=1 (参照2019-01-31)
- 10) 佐藤憲子. 父親の育児参加行動と父母の育児意識との関連. 北日本看護学会誌 2010 ; 13 (1) : 31-43.
- 11) 小路ますみ, 松原まなみ. 蓄積疲労の観点からとらえた育児不安の軽減施策—都市在住の核家族第1子, 1歳未満の子どもをもつ母親の調査から—. 日本在宅

- ケア学会誌 2006 ; 10 (1) : 56-67.
- 12) Berk SF. The gender factory : the apportionment of work in American households, New York : Plenum Press, 1985 : 1-211.
 - 13) 石井クンツ昌子. 育児・家事と男性労働. 日本労働研究雑誌 2018 ; 10月号 (No. 699) : 27-39.
 - 14) 孫 詩或. 女性の分業意識と男性の家事・育児. 教育福祉研究 2016 ; 21 : 93-105.
 - 15) Belsky J, Kelly J. 安次嶺佳子訳. 子供をもつと夫婦に何が起るか. 東京 : 草思社, 1997/1995 : 10-282.
 - 16) Kluwer ES, Heesink JAM, van de Vliert E. The division of labor across the transition to parenthood a justice perspective. Journal of Marriage and Family 2002 ; 64 (4) : 930-943.
 - 17) 漆野裕子, 木村知子. 夫婦間での家事, 育児の役割分担に関連する文献研究. 聖泉看護学研究 2019 ; 8 : 37-44.
 - 18) 河本恵理, 田中満由美, 杉下征子, 他. 父親になるプロセス. 母性衛生 2018 ; 58 (4) : 398-405.
 - 19) 石井クンツ昌子. 「育メン」現象の社会学—育児・子育て参加への希望を叶えるために. 京都 : ミネルヴァ書房, 2013 : 149-187.
 - 20) 桑名行雄, 桑名佳代子. 1歳6カ月児をもつ父親の育児ストレス—親役割認知および性別役割態度との関連—. こころの健康 2005 ; 21 (1) : 42-54.

[Summary]

Purpose : This study aimed to clarify the characteristics of child-nurturing and housekeeping behaviors by fathers based on the child-nurturing perspectives in married couples.

Methods : This study questioned 124 married couples who visited the municipal health center for their first

child's 18-month pediatric municipal health check-up to examine the child-nurturing and housekeeping behaviors by the father and married couples' perceptions on the father's involvement in child-nurturing "father's child-nurturing perception." The couples were divided into two groups based on their child-nurturing perception : those who thought that fathers should actively participate in child nurturing and those who thought otherwise. The total scores for each child-nurturing behavior scale and subscale were compared (Mann-Whitney U test).

Results : Responses were obtained from 71 married couples. In the group in which mothers thought that fathers should actively participate in child-nurturing (n=30), the score of the father's housekeeping behaviors evaluated by the married couples was higher than the that of the group that did not think so (n=38) (U=301.0, $p < .01$ and U=369.5, $p < .05$, respectively). In the group in which fathers thought that they should actively participate in child-nurturing (n=36), the score of the fathers' child-nurturing behaviors evaluated by mothers was higher than that of the group that did not think so (n=27) (U=342.5, $p < .05$).

Conclusion : The father's child-nurturing perception as perceived by the mother may affect fathers' perception on housekeeping behaviors. These results also suggest that the fathers' perception of child-nurturing leads to them taking proactive action in child-nurturing.

[Key words]

child-nurturing and housekeeping behaviors,
child-nurturing perspective,
18-month pediatric health check-up